ビッグイシューにおけるホームレス包括的アセスメント記入マニュアル およびトレーニングプログラムの開発的研究

○　京都大学　　氏名　知念　奈美子（6813）

キーワード３つ：ホームレスアセスメント、アセスメントスキル、アセスメントトレーニング

１．研 究 目 的

本研究の目的は、ホームレス支援の社会的企業ビッグイシュー日本（以下、BIJ）の販売者・利用者対応スタッフ向けアセスメントツール記入マニュアルおよびトレーニングプログラムの開発である。

ホームレス支援団体には、支援者の要件に社会福祉士や精神保健福祉士等の法的位置づけが無く、福祉に限らず専門職が少ない上、慢性的に人手不足の状況である。そのため、ソーシャルワークの支援プロセスに沿って当事者のニーズをしっかりアセスメントしてから援助計画を立て､援助を実施するという人員や時間的ゆとりのある現場は非常に少ない。効率的かつ効果的な支援を展開するには、ホームレス者の生活状況といった社会的領域とともに心身の健康状態等、臨床的な領域をもカバーし、更に簡便に使用できるアセスメントツールが必要となる。

アメリカの大規模なホームレス支援 NPO コロラドホームレス連合が開発した Colorado Coalition for the Homeless Consumer Outcome Scales が上記の条件を満たしていると考えられたため、BIJ スタッフと本研究者が協働で修正日本語版（以下、CCH-COS 修正日本語版）（知念、2012）の開発を行った。しかし、ツールの高い信頼性を確保するには、アセスメント実施者のアセスメントスキルとともに臨床的な視点や知識も必要であることが明らかとなった。本研究は、BIJ スタッフが CCH-COS 修正日本語版を使用したアセスメントスキルとその作業に必要となる臨床的知識や視点を向上させるための CCH-COS 修正日本語版記入マニュアルおよびアセスメントトレーニングプログラムの開発を目的としている。

２．研究の視点および方法

アセスメントの概念に馴染みの無いスタッフにも、参照しながら記入することで CCH-COS 修正日本語版の作業のポイントや、内容の理解を助ける記入マニュアルを作成し、マニュアルを使用したアセスメントトレーニングを実施することで、アセスメントスキルの向上と臨床的視点・知識の獲得を助長することが可能になると考えられる。

本研究者は BIJ 内においては本開発プロジェクトの一員という位置づけであり、BIJ ス

タッフとの協働作業を通してCCH-COS修正日本語版記入マニュアルおよびトレーニングプログラムの完成を目指しているため、アクションリサーチの枠組みで研究を進めている。2012年2月から5月にかけて、BIJ大阪事務所の販売者担当スタッフらと定期的にミーティングを実施し、記入マニュアルの内容、記述表現、添付資料について検討・吟味を重ね、次にトレーニングプログラムの構成内容、形式、講師等について話し合った。

３．倫理的配慮

CCH-COS修正日本語版開発から、記入マニュアルおよびトレーニングプログラムの開発までの一連の研究プロジェクトは、BIJスタッフにとっては業務の一環であり、本研究者はプロジェクトの一員として認識されている。本研究結果は、BIJにおける研究プロジェクトの結果として発表することとなっているが、BIJ販売者が事例等から特定されないよう、マニュアル等の記述や内部資料についても配慮されている。

４．研 究 結 果

本記入マニュアルは、アセスメントシート各項目記入の基準や分類、用語等を整理し、情報収集の方法や記入例等を付けて、実施者となるBIJスタッフにとって具体的な書き方が分かるように工夫された。このマニュアルを参照しながら作業を行えば、CCH-COS修正日本語版の記入・レビューが最低限可能になる内容を目指した。専門用語は、BIJスタッフにとって馴染みが薄く分かりづらかったため、用語の整理としてコラムを追加したり、文章表現を変えるなどして対応した。その検討作業の中で、アルコール依存症の病理等、臨床的領域について多くの質問がスタッフから寄せられたため、ミーティングの時間内で説明していったところ、ミーティングそのものがトレーニングセッションのような状態になっていた。

マニュアルの完成とともに、トレーニングプログラムの枠組み作りに作業を移行した。全体的なアセスメントシート記入の流れはマニュアルでカバーされているが、特に臨床的領域については、身体的健康、こころの健康（精神保健）、アルコール依存症等の項目ごとに追加で専門家の講師に依頼してワークショップ・講習会を設けることとなった。

５．考 察

個人の身体的・精神的状態とその周りの物理的・社会的環境を包括的に把握するアセスメントは、ソーシャルワーカーにとって自然な作業であっても、特に対人援助職としての背景を持たないBIJスタッフには全く馴染みの無いものであり、日常業務化にあたり不安を感じていたため、検討作業は前進と後退を繰り返して進んできた。多忙な現場で未知の作業を受け入れるには、その作業全体の流れをイメージし、メリットを感覚的に理解することも準備性を高める上で必要になると考えられた。